

〈松山支部〉
キラリと光る「愛媛県内大学間
インターンシップ連絡協議会」の取組
松山東雲女子大学・短期大学の奮闘ぶり

NHKの四国だけのローカル番組で「四国にビタミン」という番組がある。地域の元氣な個人や団体を紹介する番組である。先の放送で「今自分が住んでいる都道府県以外で好感を持っている県は？」という質問に四国の四県はいずれも全国の四〇位台であったと司会者が言っていた。確認した訳ではないが、上位には北海道や沖縄などいわゆる観光地とか東京・大阪などの大都会が並ぶと言う。

ここでいう好感とは印象深いという意味もあり、つまり、四国四県は印象が薄いという結果である。住民としては残念であるが、仕方ないかなとも思う。それでも機構支部としては四国の大学の活動で全国に胸を張って報告できるものがないかと目を光らせている。そんな中で今回の小粒ながらキラリと光る取組についてお知らせしたい。

愛媛県内四大学間インターンシップ連絡協議会

この協議会は大掛かりな大学間のコンソーシアムという訳ではないが、インターンシップについて四大学（愛媛大

学・松山大学・松山東雲女子大学・松山東雲短期大学）が学長名で協定し二〇〇三年度からスタートしている。

その理由は、近年、愛媛県内の企業も大学からの要請や社会貢献と自社PRのためにインターンシップ研修生を受け入れ評価されてきたが、同時にいくつかの問題も生じてきていた。その一つが各大学や学生からの無秩序な受け入れ要請や企業訪問であった。これに対応するため企業側は多大な業務負担を強いられ、やむなく受け入れを中止する企業も出現するなど大学や学生にとって自縄自縛に陥る危険があった。また、受け入れプログラムが確立しておらず、どのように対応すべきなのか暗中模索の状態であった。そこで、これらの問題解決のために誕生したのが「愛媛県内四大学間インターンシップ連絡協議会」である。事務局は持ち回り制で三年目に入り、今年度は松山東雲女子大学・短期大学が担当している。

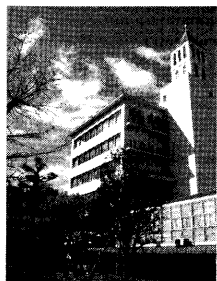
国立（設立当時）の総合大学と地方の私立大学、そして女子大学、短期大学の合体であるから、当初からさまざまな困難はある程度予想されていた。キャパシティや学部構成の異なる四大学の窓口を一本化するにあたって、まず、各大学内の調整が不可欠であった。愛媛大学では、伝統的に独自の派遣先を確保し、学部ごとに独自の取組を行うことが多かったが、このプロジェクトの誕生で学部を超えた

共同の枠組みが完成、まず学内が統一された。また、すでに先進的な取組を展開していた松山大学でも二〇〇二年度に全学的な委員会組織が立ち上がっており、松山東雲女子大学・短期大学でも同様に学内の窓口を一本化した。そこで、それを機に二〇〇三年度から四大学インターンシップ連絡協議会が設立されたのである。そして、直ちに行政や関連経済団体の後援を得てインターンシップ・プログラム合同説明会を実施し、受け入れから評価表提出までのスケジュールが統一された。

初年度、この合同説明会は二日間実施され、受け入れ企業・団体と学生たちが直に面談することで、お互いのミスマッチを防ぐことに役立った。例えばインターンシップを単なる職業体験と思っている学生と、専門性を求めあわよくばトライアル雇用と思っている企業がセットされたらお互いに不愉快な思いをすることは目に見えている。逆もまた然りである。参加する学生と企業の考え方はさまざまであり、事前にお互いの考えを披瀝し合い、ミスマッチを最小限に押さえることがねらいであった。

二年目には、受け入れ企業・団体への対策としてアンケート調査を実施した。結果は概ね好評であったが、一部に受け入れプログラムの組み立てが困難であるとの声があり、より効果的なプログラム構築のための講習会を開催した。

つまり受け入れている企業の中にはそもそも何を研修させるのかがはっきりしていなかったり、部署によっては、アルバイト学生と混同した対応で不評を買ったりしたケースが見受けられたのである。



松山東雲女子大学・短期大学

さて、いよいよ三年目に入り懸案であった関連文書も、評価票を除き、概ね統一することができた。受け入れ企業・団体からの要望、学生からの要望も連絡協議会で取りまとめ、年度ごとの総括と次年度に向けてのプログラム構築にと事務局の松山東雲女子大学・短期大学キャリアサポートセンターのスタッフは八面六臂の活躍である。しかし、残された課題も多い。参加学生の増加は、当然ながら受け入れ先企業・団体数のさらなる確保を求められている。加えてインターンシップの質の向上と多様化への対応も求められている。「課題の克服は、一朝一夕に達成できるものではないが、今後もこのプログラムに関わる多くの教職員の情熱に支えられて活動を発展させたい」と同大学の桐木陽子キャリアサポートセンター長は控えめに語るが、四国の片隅の「連携」をキーワードにした大学の取組は小粒ながらキラリと光っているのである。